

(若狭国の近世 街道と湊を活かした国づくり)

近世の若狭 道と港を活用した地域の発展

概要

日本の近世（1568年～1867年）の間、若狭地方を治めた領主たちは、彼らの管轄下にある土地を開発し、富と権力を増大させるため、道路や港を利用しました。彼らは交易と税を統制し、新しい法律を導入し、熊川宿という宿場町や小浜の港町のような場所を、繁栄した交易の中心地へ成長させるのを助けるプロジェクトを実施しました。

もっと詳しく知る

若狭国の統治

1587年には、浅野長政（1546年～1611年）が若狭国を治めるよう任命されました。徴税のための検地を行った後、彼は1589年に熊川宿の様々な税を免除する勅令を出しました。この地域は古くから交易と旅の交差点となっていました。新しい政策は商人に有利なものであり、それによって熊川宿は多くの運送代理店、運搬人の駅、店舗、宿泊施設を備えた宿場町へと発展させるのを助けました。その結果、熊川宿と琵琶湖沿いにある今津港を結ぶ主要ルートであった九里半街道など周辺道路の交通量が大きく増加しました。1595年、若狭国の新たな統治者となった木下勝俊（1569年～1649年）は、不適切な行為、特に贈収賄に対する厳格な法律を含む、庶民と役人に対する一連の規則を発行しました。

権力者との絆

小浜の港町の多くの商人は、16世紀末の日本の事実上の指導者であった豊臣秀吉（1537年～1598年）に好意を持っていました。彼らの中には、政府に代わって特定の商品を再販し利益を得ることを許可された者もいて、商品の顕著な例としては、フィリピンからのルソン陶器や秀吉が年貢として徴収した米などがありました。さらに、豊臣家の者と小浜の商人との結びつきは、小浜の特定の家族の社会的地位と経済的地位を向上させるのに役立ちました。

小浜藩の開発

17世紀初頭、徳川幕府の創始者である徳川家康（1543年～1616年）は、大名という領主によって統治される藩の体制を確立しました。家康は京極高次（1563年～1609年）を小浜藩の初代藩主に任命しました。京極は、小さな後瀬山城に取って代わる小浜城の築城を開始し、防御を強化し、新しい城の周りに武家屋敷の地区を造りました。1634年からは酒井家が藩を統治し、彼らが小浜城の築城を完了させ、小浜がさらに繁栄した港町に成長するのを助けました。酒井家は、海運交易を監督し、商人の事業を支援し、寺院や神社に資金を提供し、若狭漆器などの地域の

工芸品の発展を促進しました。

展示品

展示されている資料は、日本の歴史における近世の若狭地方の発展に関連するものです。江戸時代（1603年～1867年）の絵巻の複製品には、熊川宿という宿場町の鳥瞰図が描かれており、それは現在の町の配置とよく似ています。旅人や物資の動きを監視していた番所は、図の中ほど、宿場町の入り口の柵の近くに見ることができます。浅野長政が1589年に土地の検地を経て発行した布告の複製は、特定の税金から熊川宿を免除しています。掛け軸は、適切な行動の規則を概説した1595年の木下勝俊による法令の複製を展示しています。